

特別展示：小松安弘コレクション寄贈記念

日本の名刀 国宝7点を含む刀剣14口を3年ぶりに一挙公開

2019年12月18日(水) - 2020年4月5日(日) 会場：常設展示室

※月曜休館 ただし1月13日(月・祝)、2月24日(月・休)は開館。12月28日(土)～1月1日(水)、1月14日(火)、2月25日(火)は休館。

※館長と学芸員によるギャラリートーク 12月18日(水)、1月11日(土)、2月15日(土)、3月14日(土) 午後2時より



国宝 太刀 銘筑州住左(号江雪左文字)

2018年(平成30)11月、福山市は、小松啓子氏より、国宝7口、重要文化財6口、未指定品1口の刀剣の寄贈を受けた。この刀剣コレクションは、福山市に本社を置く株式会社エフピコの創業者、故小松安弘氏が収集したもので、ふくやま美術館に寄託されていたものである。小松安弘氏は、福山市民の方々に最高の日本刀を鑑賞していただきたい、そしてそれを活用することで日本中の愛好家に福山へ来てもらいたいとの思いを抱いていたことから、これらの刀剣をふくやま美術館が保管し、公開することになった。

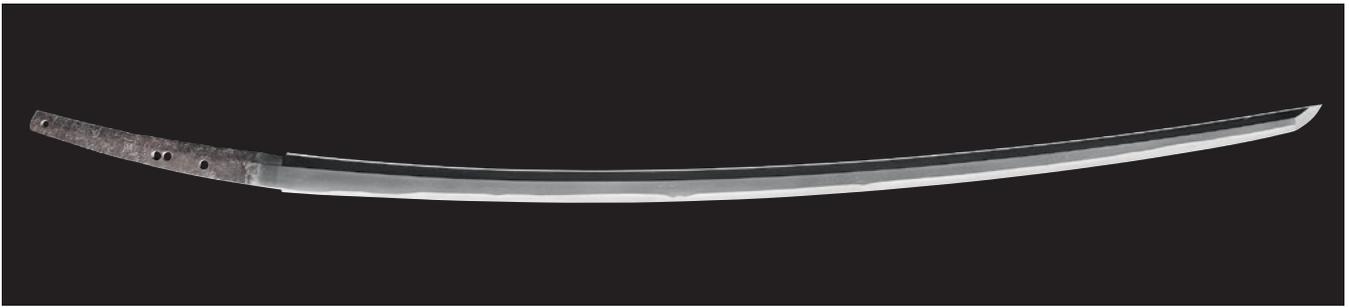
今、日本には約250万点もの日本刀が残っている。そのうち500点ほどが重要文化財として、120点ほどが国宝として文化財指定を受けている。この日本刀の国宝がいかに精選された作品であるか、その数からも理解できるであろう。国宝の刀剣の数でいえば、東京国立博物館が所蔵する19口が、日本で最大のコレクションであるが、今回、当館が国宝7口の寄贈を受けたことにより、名古屋の徳川美術館とともに、それに次ぐ数の国宝の刀剣を所蔵することとなった。

日本刀は武家にとって最も重要な道具であり、将軍家や大名は数多くの名刀を集めていた。それらは、将軍、藩主が自らの指料として使用するほか、将軍家や大名との間で贈答品として用いられてきた。福山藩初代藩主水野家は、名物日向正宗の短刀(三井記念美術館蔵)を、最後の藩主となった阿部家も、京の綾小路定利の太刀(東京国立博物館蔵)や、大和の当麻国行の太刀(刀剣博物館蔵)を所有しており、この3口は国宝に指定されている。

このたび寄贈を受けた国宝は、左太刀(号江雪左文字)、左短刀(号じゅらく(太閤左文字))、古備前正恒太刀、新藤五国光短刀(名物会津新藤五)、一文字吉房太刀、一文字則房太刀、備前国宗太刀である。左文字は、現在の筑前隠岐の浜(現在の福岡県博多市)の刀工で、正宗の弟子と伝えられる。江雪左文字(No.43)という名は、小田原北条家の家臣であった板部岡江雪斎が所持したことに由来する。江雪斎から徳川家康に献じられ、家康からその子で紀州徳川家の祖頼宣に贈られ、それ以後紀州徳川家に伝わった。左は短刀の名手として名高く、太刀はこの作品が唯一である。その左の短刀を代表する名刀が、聚楽左文字である。これは豊臣秀吉の愛蔵品で、秀吉の所蔵品を図絵とした巻子に「じゅらく」と注記があることから聚楽左文字と呼ばれた。秀吉から家康へ贈られ、2代将軍秀忠はこれを指料としたが、浜松藩主井上正就に下賜され、昭和初期まで井上家に伝わった。

正恒は、古備前と呼ばれる平安時代中期の備前国(現在の岡山県)の刀工である。古墳時代から平安時代初期までは反りのないまっすぐな直刀が主流であり、平安時代中期ごろになって、反りのついた日本刀が出現する。その初期の刀工が、京の三条小鍛冶と呼ばれた宗近、そして伯耆国(現在の鳥取県)大原の安綱で、安綱は源頼光が大江山の酒吞童子を征伐した太刀、名物童子切安綱の作者として有名で、宗近も能の小鍛冶のモチーフとなった刀工として知られている。その二人より少し遅れて出現したのが、この正恒である。正恒は、この時期の太刀としては洗練された鍛え、整った直刃の刃文で、高い技術を見せる。正恒だけで国宝は5点もあるが、阿波国(現在の徳島県)の蜂須賀家に伝来した本作(No.36)は、その姿の美しさで抜きんでた一口といえよう。

会津新藤五(No.34)は、会津藩(現在の福島県)を領した蒲生氏郷が所持していた短刀である。のちに前田家が入手し、徳川綱吉に献上され、次の将軍となった家宣の子、家千代の誕生を祝して贈られた。作者の新藤五国光は相州鍛冶の祖と言われ、日本刀史上最も有名な刀工、正宗の師と伝えられる。1719年(享保4)、



国宝 太刀 銘正恒



国宝 短刀 銘国光
(名物会津新藤五)



重文 脇指 朱銘貞宗/本阿
(花押)(名物朱判貞宗)

8代将軍吉宗の命によって編纂された『名物帳』168口の一つにあげられている。

吉房と則房は、備前国福岡（現在の岡山県瀬戸内市）に住んでいた一文字派の刀工で、この流派はとくに重花丁子と呼ぶ華やかな刃文を焼くことで知られている。また、国宗は日本刀最大の生産地、備前長船に住んでいた刀工で、この太刀も華やかな丁子乱れの刃文を焼いており、その代表作といえる。

これらのほか、重要文化財にも優れた太刀、短刀がある。なかでも、朱判貞宗(No.35)は、名物帳記載の一口で、作者の貞宗は、正宗の弟子とも、子とも伝えられている。師の正宗は硬軟の鋼を交え、刃文を構成する粒子を強調した力強い作風を創始したが、その作風を伝えながら穏やかさが加わっているのが貞宗の特徴である。徳川秀忠から前田利常が拝領した朱判貞宗は、前田家に長らく伝えられていた。また、国清は京の粟田口派の刀工で、国友を長兄とする6人兄弟の四男であると、鎌倉時代に書かれた刀剣書『観智院本銘尽』に系図が載る。これによれば、国友と三男国安は、太刀を自ら鍛錬したという後鳥羽上皇の相手をし、また次男久国は上皇の師範であるという。まさに鎌倉時代初期の名門の刀工であるが、現存する作品はこの太刀が知られるだけである。

未指定品として、備前長船の長義の刀がある。阿部正弘が徳川家定から台場完成の功により拝領したと伝えられている。これは阿部家に伝わったもので、もっとも新しく小松安弘コレクションに加わった。長義は南北朝時代の長船派を代表する刀工で、この時代特有の、鋒が大きく、身幅の広い豪壮な姿形の太刀を多く作っている。

(ふくやま美術館館長 原田一敏)

作家名	生没年	作品名	制作年	縦×横×奥行(cm)	寄託(*)
国清	-	重要文化財 太刀 銘国清	鎌倉時代(13世紀)	刃長 79.4 反り 2.2	
伝来国光	-	重要文化財 太刀 無銘伝来国光	鎌倉時代(14世紀)	刃長 70.0 反り 2.4	
光包	-	重要文化財 短刀 銘光包	鎌倉時代(13-14世紀)	刃長 26.4 内反り	
国光	-	国宝 短刀 銘国光(名物会津新藤五)	鎌倉時代(13世紀)	刃長 25.4	
貞宗	-	重要文化財 脇指 朱銘貞宗/本阿(花押)(名物朱判貞宗)	鎌倉時代(14世紀)	刃長 33.8 反り 0.6	
正恒	-	国宝 太刀 銘正恒	平安時代(11-12世紀)	刃長 77.6 反り 2.7	
吉房	-	国宝 太刀 銘吉房	鎌倉時代(13世紀)	刃長 73.9 反り 3.3	
則房	-	国宝 太刀 銘則房	鎌倉時代(13世紀)	刃長 77.4 反り 3.0	
国宗	-	国宝 太刀 銘国宗	鎌倉時代(13世紀)	刃長 72.7 反り 2.4	
兼光	-	重要文化財 太刀 銘備州長船兼光/延文三年二月日	南北朝時代(1358)	刃長 88.8 反り 2.8	
盛景	-	重要文化財 太刀 銘備前国住長船盛景	南北朝時代(14世紀)	刃長 74.2 反り 2.3	
長義	-	特別重要刀剣 刀 無銘伝長義	南北朝時代(14世紀)	刃長 71.1 反り 1.6	
左	-	国宝 太刀 銘筑州住左(号江雪左文字)	南北朝時代(14世紀)	刃長 78.2 反り 2.7	
左	-	国宝 短刀 銘左/筑州住(号じゅらく(太閤左文字))	南北朝時代(14世紀)	刃長 23.6	